

FAIRY TAIL 天候魔法 の眠り姫

唯野歩風呂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フェアリーテイルの魔道士、レーナ・フェルナンデスはいつも寝ている。仕事もろくにせず寝ているのでマスターであるマカロフは行動力のあるナツ・ドラグニルと共に行動を命じた。これは、そんなレーナが眠気と戦いながら依頼をこなす物語である(?)
名前の通りレーナはジェラルルの妹です。が、本人にその記憶なし。
アットノベルスの方にも掲載しております。

目次

一、 出会い	1
二、 辛いモノ	7
三、 新たな仲間	14
四、 妖精の尻尾	23
五、 竜の子	31
六、 ハコベ山	35
七、 天候魔法	39
八、 天候魔法の欠点	46
九、 ルーシィ頑張る	51
十、 下山・・・	56

一、出会い

港町『ハルジオン』

「ナツ・レーナ！ついたよハルジオン。起きて起きて!!」

青色のしゃべる猫(?)が、列車の座席でぐったりしている二人に声をかける。そのうちの一人、ピンク色の髪をした少年の方は、青い顔でぐったりしている。

「だ、大丈夫ですか?」

「アイ!いつものことです」

駅員が声をかけると、青色の猫——ハッピーが答える。

「はあ。……えっと、そちらのお客様は……」

駅員は座席に沈んでいるもう一人を指した。

「大丈夫です。寝てるだけなので」

「すぴー、すぴー」

確かに寝息が聞こえる。

「無理……もう二度と列車には乗らねえ……うつぷ」

「情報が確かなら、この街にサラマンダーがいるはずだよ。いこ！」

「才工く……。ちよつと休ませて……」

「すぴー」

ホ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

「あ」

ハッピーが振り返ると、列車が動き出していた。そして、窓から身を乗り出していたナツは、涙と涎をまき散らしながらハッピーに助けを求めている。

「すぴー」

その中でも、幸せそうに寝ていた人物が一人――。

ふらふらと歩くナツ達一行。

「なあ。サラマンダーってイグニールのことだよな？」

「火の竜なんてイグニールしか思い浮かばないよね」

「だよな」

と、ナツ達一行の耳に「サラマンダー様!!」という声が聞こえてきた。

「サラマンダー!?!」

ナツとハッピーは顔を輝かせ、人ごみへ向かった——のだが……。

「誰だお前」

完全に人違いであつた。

キラリと齒を光らせた男は一瞬焦つたように見えたがすぐに冷静になり、炎を出現させた。

「夜は船でパーティをやるから、みんな参加してね」

男は女の子たちの歓声に見送られて去って行つた。

「なんだ、あいつは」

「ほんと、いけ好かないわよね」

ナツが啞然と男を見送ると、金髪の女の子が話しかけてきた。

「ありがとね」

「あ？」

「あ、そういえばナツ。レーナは？」

「……あれ!? いない! 探すぞハッピー!」

「アイサー!!」

「ちよ、ちよつと、無視しないでよ!」

慌てて来た道を駆けだすナツとハッピー。そして金髪少女のルーシイ。

「あ、いた!」

暫く戻ると、道のど真ん中で倒れている人を見つけた。

「レーナ、起きて! こんな所で寝たら風邪ひくよ!」

「いやいや、そういう問題じゃないでしょ」

ルーシイは倒れている人に近づいた。

とても綺麗な青い髪をしている女の子だった。少し小柄だが、恐らく15・6歳くらいだろう。

「どこか具合でも——」

「いえ、寝てるだけです」

「すびー、すびー」

「ええええええええっ!!」

道のど真ん中、それも女の子が幸せそうに寝ていることに驚くルーシイ。そのうるささにレーナが眉をひそめる。

「んあ……むにや」

「お? 起きたかレーナ」

「おはようございまグー」

「寝るな!」

これが、ナツとハッピーそれにレーナがルーシイと出会った時の出来事である。

二、辛いモノ

「あたし、ルーシィ。よろしくね」

「アイ！」

バクバクバク

すぴー、すぴー

「あゝ……ナツとハッピーと、レーナだっけ？」

「あんた、バクバク、いい人だな、もぐもぐ」

「わかったから、もっと落ちて着いて食べれば？何か飛んできてるし（つていうかお色気代1000Jがパーだな、これ）」

「すぴー」

ルーシイはいまだに寝ている青髪の少女レーナを見た。

道端で寝ている所を何とか起こし、レストランまで連れてきたが、席に着いた途端テーブルに突っ伏して寝始めた。

「えっと、レーナ……ちゃん？何か食べなくてもいいの？」

「ご心配なく。レーナの注文はおいらがしておいたから」

魚を頬張るハッピーが答えてすぐ、ウェイターが料理を運んできた。

『激辛！炎の激辛ラーメン激辛風味ゲキカラ』、でございます」

「激辛が三つも！っていうか最後の語尾みたいな何!？」

ルーシイがツツコムもテーブルに置かれたモノを見て言葉を失った。

それは例えるならマグマ。スープは真つ赤に染まりドロドロと揺れている。麵を持ち上げたらしぞかしよく麵に絡みつくことだろう。

「う、見てるだけで辛くなってきた……。ちよっと、注文間違えたんじや」
「これでいいんです」

この少女が、こんな辛い物を……？

すると、レーナは鼻をひくつかせてムクリと体を起こした。

レーナはぼーっとした様子で目の前に置かれた料理を見ている。

た、食べるのだろうか……。

ルーシィと、お店にいるすべての人が彼女の動向を息をのんで見守る。
レーナは箸を取ると――

ズゾゾゾゾゾ――

思いつきりすすりはじめた。

『う、うわー……』

見てるだけでも辛くなってくる。

「レ、レーナちゃん、辛くないの？」

「？辛いですよ」

「え!?じゃあ、何で食べてるの? っていうか食べれるの?」

「この、ピリツとした感じが目の覚めるようで……グー」

「寝んのかい!!」

「はっ!」

覚醒したレーナ（若干眠そうだが）はさらにテーブルに常備されている唐辛子をふりかけズゾゾゾゾと音を立ててすすった。

それを見て胸やけのする人々。

「レーナの食事は見ない方がいいよ。食欲なくすから」

手遅れな時に忠告するネコちゃんだった。

「それにしても、気前がいいですね。見ず知らずの私たちにこんな御馳走を……ズゾゾ」

「えーっと（う、見ないようにしないと）あ、あのサラマンダーって男ね、*“魅了”*の魔法を使ってたの——」

ルーシイの話によると、非合法の魔法であのサラマンダーを好きになりかけたが、ナツが飛び込んできたおかげで完全にかからずにすんだ、ということらしい。

「なるほど。……しかし、現れただけでチャームが解けるなんて……」

レーナの視線が横にいる、ものすごい勢いで食べ物を掻きこむ人物を見る。

「……惚れたか」

「いやいや、違うから!」

「冗談です」

ズゾゾゾゾ

レーナは何事もなかったかのように麵をすすめるのを再開する。

「くっ……。こう見えても、一応魔道士なんだー、私」

「ふおう」

「へー」

「まだギルドには入ってないんだけどね。あ、ギルドっていうのはね」

魔道士ギルドとは、魔道士が集まる組合。そこに依頼人が依頼を出し、魔道士に解決してもらう、仲介所のような場所である。

ルーシイは熱く、ギルドへの思いを語り、ナツとハッピーは何とも言えない顔をして見合わせた。

「よくしゃべるね」

「あ、そういえば、あんたたち誰か探してたみたいけど」

「アイ！イグニール」

「もぐもぐ。サラマンダーがこの街に来るっていうから来てみたはいいけど、別人だったな」

「見た目のことじゃなかったんだね」

「火の竜つつーから、てつきりイグニールのことかと思ったんだけどなー」

「見た目が火の竜って、どうなのよ人間として」

「ん？人間じゃねーよ。イグニールは本物のドラゴンだ」

「はあ!？」

ルーシイはポカンと口を開けて固まった。

代わりにレーナが「ナツ……」と声をかける。

「ドラゴンがこんなところにいるわけないよ」

「はあ!!」

「今気づいたんかい！……ってかあんた汁まで飲んじやったの!!??」

衝撃を受けるナツとハッピーにツツコムも、赤いところのなくなった器に衝撃を受けるルーシイ。

「レーナ、気付いてたんなら言えよ！」

「話聞いたとき寝てた」

レーナはしれつと言うと、「ではお休み」と言つて寝てしまった。

「はあ……。なんか精神的に疲れた。あたしもう行くね」

ルーシイはテーブルにお金を置いて立ち上がる。

「ごちそうさまでした！」

「でした！」

「すぴー」

去り際、ナツとハッピーは通路に土下座してルーシイに頭を下げる。

「やめてえ！ 恥ずかしいから！」

「だけど……そうだ！ これやるよ。サラマンダーのサイン色紙」

「いらんわ!!」

「すぴー」

こんな騒ぎにも関わらず、完全に夢の中のレーナなのだった。

三、新たな仲間

「ぷはー！食った食った！」

「アイ！」

「もう夜だけど……」

昼にレストランへ入ったはずが、あたりはもう真つ暗。どんだけ食べるんだと言いた
い。

「ん？お前だつてずーつと寝てたじゃねえか」

「アイ」

「すぴー」

「もう寝てるし」

柵に寄りかかって眠るレーナに呆れた声を出すハッピー。

「そういうや、サラマンダーが船上パーティやる船つて、あの船かな」

ナツが海を見ると、大きな船が沖へ向かっている。

「うつぶ……気持ち悪い」

「想像しただけで酔うのやめようよ」

「ねえ、あれがサラマンダー様の船よ」

「えー、行きたかった」

「サラマンダー？」

「知らないの？今この街に来てるのよ？あの有名なフェアリーテイルの魔道士なんだから」

「……フェアリーテイル」

話に出た名前に目を鋭くするナツ。レーナも閉じていた瞼を開ける。

ナツの視線の先には船があり――

「うぐっ」

「はあ……」

レーナは眠そうに溜息をついた。

※※※※※※※※※※※※※※※※

——なんなのよこいつ。

突然現れた男たち。男たちのかたわらには、同じ船に乗っていた女性たちが眠っている。

これからルーシーを含めた女性たちはボスコへ奴隷として連れて行かれてしまう。抵抗しようとしたら、大事な鍵まで奪われ、海に捨てられてしまった。

——こんなことをする奴が……これが、フェアリーテイルの魔道士か！

憧れて、どうしても入りたくて……けど、こんなの……

「最低の魔道士じゃない！」

叫んだ瞬間、天井を突き破って人が落ちてきた。

「ナツ！」

ナツは顔を上げると――

「うつぶ」

青くなつて口を押えた。

「えーっ！ かつこ悪！」

「ルーシィ、何してるの？」

「ハッピー！」

ナツが突き破った天井の穴からハッピーが白い羽をはやして覗いている。

「騙されたのよ！ フェアリーテイルに入れてくれるって。……てか羽なんて生えてたっけ？」

「細かい話はあとだよ。行くよ！」

そういうとハッピーはルーシィを掴んで空へ飛び出した。

「ちよつと、ナツは!?! ってかレーナは？」

「……に」

「うわあ！ レーナ!?!」

突然眠そうなレーナが目の前に現れた。

そう、目の前に。

「え、レーナ……うう、う、浮いてる!？」

「浮いてます」

レーナは空中に胡坐をかいて浮いていた。

「も、もしかしてレーナって」

「うん。魔道士です」

それから、といってレーナはルーシイに、先ほどサラマンダーに捨てられた鍵を見せた。

「あ、それあたしの鍵!」

「飛んできたのでキャッチしておいた」

「ありがとう!」

レーナは頷くと、どんどん岸から離れていく船に向きあった。

「あれを岸まで戻さなきゃなんですが……」

「あ!あたしに任せて!」

ルーシイは海まで降りると、星霊魔法でアクエリアスを呼び出した。

「アクエリアス、あなたの力で船を港まで押し戻して!」

「ちっ」

アクエリアスの態度にルーシイは憤慨するも、アクエリアスの起こした大津波に飲み込まれ悲鳴を上げた。ルーシイを持っていたせいでハッピーも巻き添えだ。

「おー」

レーナは上空へ避難して船とともにルーシイたちが岸まで流されるところを見ていた。

船は見事港に突っ込み、横倒しになった。

あたりには騒ぎを聞きつけた地元民が集まってきている。

「ナツ——」

船に近寄るルーシイを見つけ、その横に降り立つ。

「あ、レーナひどいや。一人だけ逃げるなんて」

「ん？ごめん？」

「ちよつと黙ってて！」

怒られてしまった。

しかし無理もない。ルーシイはまだ知らないのだ。

岸に戻った地点で、決着がついたことに。

「言いそびれたけど、ナツも魔道士だから」

「え!？」

心配そうなルーシイにハッピーが言うと、ひどく驚いた。

「オレはフェアリーテイルのナツだ。お前なんて見た事ねえ」

「ええ!」

どうやらフェアリーテイルを語る偽物はボラと言つて、何年か前に追放された魔道士らしい。

フェアリーテイルの名を語り悪事を働いたことに怒るナツをボラは攻撃。

「ナツに炎は効かないよ」

「ふああゝ」

「何でそんな余裕なのよ!」

岩に寄りかかり今にも寝そうなルーナにルーシイが怒鳴る。

「ん?……ほれ」

目をこすり指を指すと、ちょうどナツが炎を喰い終わる所だった。

そこからはあつという間だった。

『火竜の咆哮』であらかた蹴散らされ、ナツが本物のフェアリーテイルのサラマンダーだと気付き、ナツの滅竜魔法で港を半壊させて終わった。そしてルーシイは……。

「やりすぎーっ!!」

炎に包まれた町を見て叫んだ。

「アイー!」

「アイじゃない!!」

「すぴー」

「そこー!寝るなあ!!」

ガチャガチャと鎧の音が近づいてくる。

「軍隊!」

「やっべー!逃げるぞー!」

ナツは寝ているルーナを脇に抱え、ルーシイの手を引っ張って走り出す。

「何であたしまで!?!」

「だって、俺達のギルド入りたいんだろ?」

ナツはにっこりと笑う。

「来いよ」

「……うん！」

ルーシイもいい笑顔で返した。

こうして、フェアリーテイルに仲間が一人増えたのだった。

それにしても……

「プロポーズみたい」

「うっさいわ!!」

四、妖精の尻尾

「へえーっ、ここがフェアリーテイル！」

ルーシイは妖精のマークが掲げられた建物を見上げ、目を輝かせた。

ナツ、ハッピー、ルーシイ、レーナの四人は、ハルジオンからフィオーレ王国マグノリアにある、フェアリーテイルの本拠地へと帰ってきていた。

「ただいまーっ!!」

ナツは扉を蹴破り中へ飛び込む。

みんなの「おかえり」という言葉をよそに、あたりを見回し、ある人物を見つけると――。

バキッ

顔を蹴とばした。

「何でえ!？」

突然のことにルーシイが叫んでいる。

それをゴングに、フェアリーテイルの面々は物を壊すのもいとわず、暴れだした。

「……すごい。あたし本当に、フェアリーテイルに来たんだ!」

こんな状況を前に感動しているルーシイは結構大物だと思う。
が、それも一瞬のこと。

「ナツが返ってきたってえ?」

パンツいっちよのグレイに驚き、

「これだからここの男ってのは」

酒を樽ごと飲む力ナに驚愕し、

「漢^{やつし}なら、拳で語れ！」

と言つて一発でやられることにビビり、

「やれやれ騒がしいな」

と言いながらケンカに混ざるロキに呆れた。

「上位ランクから抹消——。っていうか何よこれ。レーナ、いったいどうなつて……」

「すぴー」

「つて、寝てんのかい!!」

すぐ後ろにいたはずが、いつの間にかカウンターに突つ伏して眠っていた。ケンカの余波で色々モノが飛んでくるが、全く起きる気配はない。

ここでレーナについて説明しよう。

鮮やかな青い髪をしており、前髪は右側だけ長く目が隠れてしまっている。

髪は一見短髪に見えるが、来ているポンチョを脱ぐと下の方で結っている髪が腰のあたりでしっぽのように垂れている。

いつも眠そうで背中が丸まっており、長い裾で手が隠れているため、幽霊っぽくて夜見るとビビる。

「ちよつと起きてよーっ！このケンカ何とかしないでいいの？」

「むにや……だいじょーぶ。もうすぐマスターが……ほら」

「やめんかバカたれー!!!」

「でかあっ!!」

ピタッ

巨人の出現に、争いはぴたりとやむ。

が、ナツだけは仁王立ちして止まった奴らを笑う。

「だーはっはっは。みんなしてビビリやがつて！この勝負オレの」

プチッ

「ひっ」

踏まれた。

自業自得だ。

その大きさにビビるルーシイだが……。

シユルシユルシユル

「ちっさっ！」

もとに戻ったフェアリーテイルマスター、マカロフに思わず叫ぶ。

その後マカロフはくるくると回転しながら二階へと飛び上がるが、距離が足りず手すりに頭を打ち付ける。

うん。痛そうだ。

つていうかかつこ悪い。

しかしマカロフが手すりに立って人々を見下ろすと、みんな自然と注目した。

「まーたやってくれたのお、きさまら」

マカロフは呆れたように紙の束を振った。

「見よ、評議会から送られてきた文章の量を！ぜーんぶ苦情ばかり」

確かに多い。あれが全部苦情だとは……。

「聞いたぞ、ナツ、レーナ！ハルジオン港を半壊させたそうじゃないか！」

「い、いやあ、まあ、あれは……」

「ぐー」

「寝るなバカもん!!」

カコーン

放り投げられたマカロフの靴がレーナにあたり、レーナは椅子から落ちた。

「んあ？……おはようございます」

まったく堪えた様子のないレーナにマカロフはプルプルと怒りで震える。

「まったく。わしは上に起こられてばかりじゃ」

身に覚えのある者はばつが悪そうに顔を逸らす。

「……だが、評議員などクソ喰らえじゃ！」

紙の束が燃え出し、マカロフは空中へと放る。

「よいか！理を越える力はすべて理より生まれる。魔法は奇跡の力なのではない、我々の内にある気の流れと、そして自然界に流れる気の波長が合わさり、初めて具現化されるのじゃ。」

それは、精神力と集中力を使う。いや、己が魂をすべて注ぎ込むことが魔法なのじゃ」

魔法は自分と共にあるもの。自然と同じく共に生き、そして強く願うことで、魔法はより強くも弱くもなる。

すべては自分の心次第――。

「上から覗いてる目ん玉、気にしてたら魔道は進めん。評議員のバカどもを恐れるな。自分の信じた道を進め！」

それがフェアリーテイルの魔道士じゃ!!」

人々は指を天井へ突きだし雄叫びを上げる。

ルーシイはそんな様子に感激しているようだった。

レーナはその様子を見たあと、瞼を閉じて思った。

燃やした書類、提出するんじゃないのかなあ……と。

五、竜の子

「ナツ、レーナ、見て見て！フエアリーテイルのマーク入れてもらっちゃった！」

「あっそう。よかったな、ルイージ」

「ぐー、っププ」

「ルーシイよ！っていうかレーナ、あんた今寝ながら笑ったでしょ！」

「何言ってるのルーシイ。寝ながら笑えるわけないじゃん。バカなの？」

「ぐ……っふ」

「笑った！今絶対笑った!!」

「ねえ、父ちゃんまだ帰ってこないの？」

ルーシイが騒いでる中、ナツはマスターに話しかけるロメオを見る。

「くどいぞロメオ。魔道士の息子なら親父を信じて大人しく家で待っておれ」

「だって、三日で帰ってくるって言ったのに、もう一週間だよ！」

「確か、ハコベ山じやったか」

「そんなに遠くないじゃないか、探しに行ってくれよ！」

しかしマスターはそれを厳しく断る。

ロメオはマスターを殴り、出て行ってしまった。

「厳しいのね」

「ああはいつでも、マスターも心配しているのよ」

その時、バキツという音がし、リクエストボードがナツの拳によって陥没していた。

「レーナ、ハッピー」

「アイ」

「ふああ」

ナツは荷物を持ち、フェアリーテイルを後にする。

ハッピーもその後に続き、レーナは眠そうにあくびをしながら猫背気味で行った。

「どうしちゃったの？ あいつ」

「ナツも、ロメオ君と同じだから」

「え？」

「ナツのお父さんも、出て行ったり帰ってこなかったの」

ナツはドラゴンのイグニールに育てられた。しかし777年7月7日、突然、その姿を消して、戻っては来なかった。

「ナツは、いつかイグニールと会えるのを楽しみにしてるの」

そういうところが可愛いよね、とミラジエーンは笑う。

「ん？ だったらレーナは？ どうしてナツと一緒に？」

少ししか一緒にいなかったが、レーナはちよつとやさつとじゃ動かない。基本寝てる。

「もしかして、レーナもナツみたいに親を……」

ルーシイはしんみりと俯く。

寝てばかりいるダメな子だと思ったけど、実は苦しい過去が――

「ううん。レーナは仕事もせずに寝てばかりいるから、マスターの堪忍袋の緒が切れて、行動力のあるナツと一緒にいさせているのよ」

「やっぱり寝てんのか!!」

しんみりして損した！と憤慨する傍らで、ミラジエーンとエルフマンは顔を見合わせ、視線を下げた。

「本当は外に出しちゃいけないんだけど……（ボソ）」

「え？何か言いました？」

「ううん。何でもない」

ミラジエーンはいつもの笑顔を浮かべ、皿拭きに戻った。

六 ハコベ山

現在位置 ハコベ山

ナツ、ハッピー、ルーシイ、レーナの四人は、三日で帰ると言つたマカオが一週間たつても帰つてこないというロメオの話を聞き、マカオを探すため、このハコベ山に来ていた。

「寒いくっ！いくら山の方とはいえ、今は夏でしょ？こんな吹雪おかしいわっ！」

「そんな薄着してっからだろ？」

「あんたも似たようなものじゃない。……てか、レーナもしかして寝てる!？」

「ぐー」

レーナは現在、歩きながら眠っていた。

レーナの特技の一つであり、大抵の場所は寝て歩けるが、時々転ぶ。

そして一旦転ぶと起きるまでそのままである。

「レーナ！こんな冬山で寝ちや駄目よ！起きてゝっ!!」

「ぐーかー」

ルーシイがレーナの肩を掴んで揺さぶるも、レーナは一向に起きない。

「静かに寝かせてやれよルーシイ」

「てか、よくこんな冬山で寝られるわね」

「あい。それがレーナです」

『マカオさんはこんな場所に何の仕事に來たのよ』と申しております」

ルーシイは現在、あまりの寒さに耐えきれず、己の星霊であるホロロギウムの中に入りこんでいた。

しかも、マカオの仕事が凶悪モンスタージュアルカンの討伐と聴き、『あたし帰りたい』と申しております」……と言うしまつ。

そんなルーシーに、ナツとハッピーは若干呆れている。

「マカオーっ！ いるかーっ！」

「マカオ——っ!!」

ナツとハッピーが山に向かって叫ぶ。しかし、その叫びはすぐに吹雪へと吸い込まれて消えた。

その時、雄叫びを響かせて何かナツ達の頭上に落ちてきた。

ナツは避け、落ちてきたものを睨む。

「ヴァルカンだ!？」

ナツは戦闘態勢をとるも、ヴァルカンの様子がおかしい。

「フゴフゴ」

「？」

「！ウフオ!!」

「おいこらー!」

ヴァルカンが何かの臭いを嗅いでいたかと思うと、突然ナツとは別の方向へ飛んでいく。

ルーシイはホログラムの中で寒さに震え目を閉じていた。ちなみに、転んだレーナも中に入って寝ている。

そしてルーシイはホログラムが揺れた衝撃で目を開けた。

「~~~~~!!!!!!」

「人間の女だ。しかも二人」

ナツはヴァルカンがしゃべるのを聞き、嬉しそうに炎をまとった拳を打ち合わせた。
「しゃべれんのか」

まあ、その間にホロロギウム——つまりその中に入った二人はヴァルカンに連れ去られているのだが。

『てか助けなさいよ』『ぐー』と申しております」

ルーシイの叫びはホロロギウムの壁に遮られ、ちゃんと届くことはなかった。

七、天候魔法

ハコベ山 山頂付近 外

『何でこんなことになってるわけ？ 何この猿。テンション高いし！』と申されても……」

「女」

ゾゾゾゾツ

寒さとは違う鳥肌がたつルーシイ。

ヴァルカンはじーっとホロロギウムの中のルーシイを見つめる。

と、その時。

ピピピピッピピピッ

そんな音とともにホログラムは消え、ルーシィとレーナは放り出された。

「時間です。こきげんよ」

「ちよつとー……っ!!」

叫ぶルーシィに应える声はなく、ヴァルカンが鼻息荒く近づいてくる。

「あわわわっ! ちよ、ちよつとレーナ! 起きてっ! 何とかしてー……っ!!」

こんな状態でも寝続けるレーナの肩を掴み、必死に揺さぶる。

首がガクガクと揺れるも、レーナは起きない。

ギアアアアアアアアアアッ

迫っていたヴァルカンが止まり、振り返る。

するとそこには……。

ガアアアアアアアアッ

ブリザードバーン、通称シロワイバーン現れた。

「いやーっ！でつかいの来たー！ー！！」

「ウツホ！しまった、ここあいつの縄張りだった！」

「ガアアアアッ！！」

「逃げろっ！」

「あ、ちよつとなに一人で逃げてんのよ！」

ヴアルカンがルーシイとレーナを置いて逃げてしまった。

「お願いー起きてレーナ！お願いだからーっ！！」

「んあ？」

「レーナ！やつと起きた！！」

ようやく目を開けたレーナに泣いて喜ぶルーシイ。

しかし、目の前にはご機嫌斜めのシロワイバーン。

これを二人で何とかしなければならぬ。

そんな危機的状況にも関わらず、レーナは呑気にあくびをする。

「ふあああつ。……寒い」

「そんなこと言ってる場合じゃないのよ！緊急事態なの！」

「ん？……あら〜」

レーナは巨大なシロワイバーンを目にしても、眠そうに反応しただけだった。

「ちよつと、レーナ！何でそんなに落ちついてんのよ！」

「……………」

「レーナ？」

ルーシイは気付いた。

そうだ。レーナも女の子。こんな状況で落ちついていられるわけがない。

これは演技だ。

あたしが慌ててるからきつと落ちつかせようとしているに違いない。

フェアリーテイルの先輩だからって、甘えちゃダメた！

あたしも魔道士なんだから！

「……冬って眠くなるよね」

「さつさとなんとかしろ!!」

ルーシイは切れた。

切れたルーシイにより前にだされ、レーナは仕方ないともいうように肩を落とす。

そして、あたりを見回した。

「ここ、民家とかないよね」

「山だからね!」

質問すると、きつい言葉が返ってきた。

「……何で怒ってるの?」

「誰のせいよ!」

レーナは首をひねったが、この辺に民家がないのなら問題ない。

「んじゃ、久しぶりにやりますか」

レーナは右手を天に向けた。

ルーシイはそんなレーナを見て、そういえばレーナの魔法をちゃんと見るのは初めてと気付く。

いつも寝てばかりのレーナはいったいどんな魔法を使うのだろうか。

やっぱり、催眠の魔法とか?

そう、考えをめぐらすルーシイだったが、この場にハッピーがいてルーシイの考えを聞けば、「ルーシイってバカなの?」と言ったに違いない。

「天候魔法【稲妻（ブリッツ）】」

そう言った瞬間、吹雪が止み、暗くなった。

何事かと空を見上げると、雪を降らす灰色の雲とは違う、真つ黒な雲が上空を覆っていた。

ルーシイはただならぬ空気を感じていた。

シロワイバーンも感じたのだろう、飛びながら空を見上げている。

「落ちろ」

バリバリバリバリバリバリ
!!!!

「きゃあああああつ!」

ものすごい爆音とともに視界が真つ白に染まり、ルーシイは思わず耳を押さえ目を閉じる。

そして目を開けてみると、目の前の光景に啞然とした。

あの巨大なシロワイバーンが黒焦げになって地面に落ちていた。

「い、一瞬で……。な、何が起ったの?」

「これが私の魔法」

「魔法……」

レーナは両手を空に向かって広げた。

「天候魔法。天候を操る魔法だよ」

八、天候魔法の欠点

「す、すごい……」

ルーシイは黒焦げのシロワイバーンを見て腰を抜かす。

そしてなにより、あの寝てばかりのレーナがこんなすごい魔法の持ち主だなんて――

バリバリバリ!!

「きやーっ!」

再び雷が落ちた。

「ちよ、レーナ! もういい 『バリバリドカーン』 ギャーッ!」
近くに! 近くに落ちた!

「おーい! レーナ! ルーシイ!」

「二人とも無事——？」

ナツとハッピーの声がし、見るとハッピーがレーナの所へ飛んできて、ナツはその後から走ってきた。

「雷が聞こえたからもしかして、レーナだと思って『バリバリドゴーン』ギャアアアアッ！」

「ナツ————っ!!!」

雷がナツに直撃し、ナツは焦げた。

倒れたナツの口からは煙が上っている。

「ちよ、レーナ！攻撃止めてよ！」

「ムリー」

「はあ!？」

そういう間にも、雷はいたるところに落ちている。

この場にいるのはとても危険だった。

「何で無理なのよ！」

「あい！それは、レーナの天候魔法が、広域攻撃を専門とした魔法だからです！」

「広域って……」

「広い範囲」

「……つまり？」

「無差別イェーイ」

「イエーイじゃない!!」

ルーシイは、ブイブイとピースするレーナに殺意が湧いた。

ガ、ガアアアアアッ！

「ま、まだ動いてる！」

見ると、黒焦げになつシロワイバーンが雄叫びを上げて立ち上がる所だつた。どうやら、硬い鱗が雷から身を守つたらしい。

それでも、満身創痍だが。

「ふむ。もう一発……」

「きやつ！」

「ルーシイ！」

「ん？」

ルーシイの短い叫び声が聞こえた気がし後ろを振り向く。

「ウツホ！今の内！」

「きゃああつ！レーナ、助けて！」

「おー……」

ルーシイがヴアルカンにさらわれていた。

「あんた逃げたんじゃなかったの！」

「ウツホ！女はオレのもの！」

「レーナーっ！助けてええ!!」

うむ。このままでは仲間がさらわれてしまう。

「【稲妻（ブリッツ）】」

「え、ちよ、『バリバリバリ!!』ぎゃーっ！死ぬーっ！」

しかし、雷はヴアルカンとルーシイにあたらず、別の所に次々と落ちていく。

「む……雷は高いところへ落ちる」

ここは山。別に高いところがありすぎて狙いが定まらない。

そうこうしている内に、ルーシイは見えなくなってしまった。

山を全部壊せばみつかるだろうが、そのときにはルーシイは巻き添えで生きていないだろう。

こうなったら、ナツの人間離れた鼻に頼るしかない。

「ハッピー、ナツを起こして」

「あい！……レーナは？」

「私は——グー」

「寝た——っ!!」

九、ルーシイ頑張る

「いやーっ 離してよ変態！」

「ウツホー！」

「キヤアー！」

力の限り暴れると、氷の地面に放り出された。

周りを見渡すと氷の洞窟のようで、あの場所から上ってきたことから、山頂付近のヴァルカンの住処なのだろう。

「おんな、おんな、ウツホツホー」

「イタタタツ。このエロ猿、見てなさいよお」

恐らく、助けは期待できない。

頼りのナツは、レーナの無差別魔法の餌食になつて期待できないし、レーナの天候魔法は強力だけど、ここで発動されたら、命に係わる。

むしろ来てほしくない。

「あたしだつてやるんだから！『開け 金牛宮の扉 タウロス』!!」

雄叫びを上げて現れたのはビキニパンツを穿いた二足歩行の牛。

その背には大きな斧が背負われている。

タウロスは呼び出したルーシーを見ると――

「……ルーシーさん、相変わらずナイスバディ。モ〜素敵です!」

と目をハートにして言い放った。

「そうだ、こいつもエロかった……。ええい、もう! タウロス、あいつをやっちゃつて!!」

「モ〜ッ! お任せあれ!!」

そういうとタウロスは背中の斧を手を持ち、振り下ろす。

すると地面が割れ、ヴァルカンへと延びる。

しかし、ヴァルカンはそれをやすやすと避けると、素早い動きでタウロスへと迫る。

「速い!」

「っ!」

タウロスはヴァルカンの攻撃を迎え撃とうとし、

「オラア!!」

「ナツ!」

復活したナツに蹴り飛ばされた。

タウロスは吹っ飛び、地面に伸びた。

もう駄目っぽい。

「弱あつ！」

「おい、なんか怪物増えてんじゃねえか？」

「味方よ、味方！星霊よ！」

「猿が？」

「牛の方!! っていうかあんた、よく生きてたわね」

「まあ、レーナの無差別攻撃には昔から慣れっこだからな……ははっ」

何故だろう。この時のナツが影を背負った大人に見えた。

「くっ……察するわ。——ところで、どうしてここが？」

「俺の鼻はよく利くんだ。レーナの雷で雪が止んでたし、匂いを追ってこれた」

「まるで犬だね」

「そうね……って、レーナ!？」

気づいたら洞窟の入り口にハッピーに抱えられたレーナが眠そうな顔をしてそこにいた。

「やつほー、ルーシィ。……よく寝てる？」

「ええ。生きて——って！何で『よく寝てる?』なの!? 普通そこは『生きてる?』とか

『無事?』とかでしょ!!」

「えーっ、だって生きてるのも無事なのも見れば分かるし……そしたら、あと一つしか――」

「もつとあるわよ!」

「……ぐー」

「ね・る・なああああああ!!」

ルーシィはレーナの襟首をつかみ、ガクガクと揺さぶる。

「ルーシィ、さつきから怒ってばかり。やっぱり睡眠不足からくるイライラなんじゃない?」

「だから違ううっ!!」

※※※※※※※※※※※※※※※※

ルーシィが騒いでいる間、実はヴァルカンとナツのバトルが進んでいたりしていた。

「俺はマカオを連れて帰るんだあああああ!!」

ナツの炎をまとった拳がヴァルカンを吹っ飛ばすも、ヴァルカンはすぐに体制をお建て直し、衝撃で折れて落ちてきたつららを吹き飛ばす。

ルーシイは飛んできたつららを何とか避けた。

ナツは直撃だったが、「火にはそんなもん効かああん!」とノーダメージ。

「あ、レーナは!」

「ここだよー」

見上げると、ハッピーが寝ているレーナを抱えて飛んでいた。

「超お荷物! 何で起きないの!」

「すびー」

レーナはとても幸せそうに寝ていた。

そう、憎たらしいほどに。

土埃が晴れ、だんだん視界がよくなってきた。

目をこらし、ヴァルカンを見ると――。

「ウツホ」

手には巨大な斧が握られていた。

十、下山・・・

「タウロスの斧!?(あああ、あたしレーナのことお荷物とののしっておきながら人のこと言えない!)」

ルーシイは気絶しているタウロスを起こそうとするも、起きる気配なし。

「タウロス戻りなさい!そうすればあの斧も消えるのよ!」

その間も、ナツは武器を得たヴァルカンの攻撃を避ける――が、

つるん

「がつ!」

ナツは氷に足を滑らせてしまう。

「ウツホ!チャンス!」

ヴァルカンは転んだナツ向けて斧を振り下ろす。

「ぐうつ」

ナツはすんでの所で斧を白羽どりで防ぐ。

「あわわっ、ナツが苦戦してるよお！」

ナツが心配でオロオロし始めたハッピーに合わせ、抱えられていたレーナが左右に揺れる。

「よし！おいらがナツを助けに行くぞ！『ガン！』あ……」

「んあ？」

レーナは突然訪れた痛みにも目を覚ました。

「あ、レーナ……その……」

ハッピーが近寄ってきたが、レーナの目は苦戦を強いられているナツに向かった。

「おー、ナツ苦戦してるね。……手伝おうか？」

「『絶対やめろ（て）！！』」

「えー」

間髪絵を入れず三方向からNOのお返事がきた。

「（当たり前じゃない。こんなところで広域魔法なんて使われたらあたし達生き埋めよ！本人に悪気がないところがさらに質悪い！）」

逢って数日だが、レーナのことを理解してきたルーシイなのであった。

「んー、でも仲間は見捨てられない……やっぱり手伝う」

「やめてー！ー！ー！！！」

「天候魔法」竜——

「ふん！」「ガッ」

「ぐふつ」

レーナは技を出す前にうつぶせに倒れた。

見ると、その頭には、たんこぶが二つできていた。

「な、なんて非道なネコちゃんなの。さつき自分が誤って落としてぶつけた場所を殴りつけるなんて……」

「平和のためには仕方がないことです」

「怖っ！……でも、今は正しい行いだっただわ」

ルーシィはあえて倒れているレーナから目を背け、ナツの戦いを見守った。

「んんんんつががつ——食ったら力が湧いてきた！」

「刃を溶かした！身体の熱で！？」（しかも食べてる！）」

「あい！」

「ぐー」

「つてあれ？ 気絶じゃなくて寝てる？ ガチで寝てる!? もしかして！」

「それがレーナです」

「行くぞ！ 『火竜の鉄拳』!!」

ナツ渾身の一撃がきまり、ヴァルカンは吹っ飛んでまわりを震わすほど強く氷の壁にたたきつけられる。

ヴァルカンはそのまま動かなくなった。

どうやら気絶したようだ。

「やったー!!」

「あーあ、このサルにマカオさんの居場所聞くんじゃなかったの?」

「あ、忘れてた」

つとそのとき、気絶したヴァルカンの体が光だし、魔法が収束し始める。

「え、な、何?」

「何だ!?!」

軽い爆発のような衝撃の後、光の中から現れたのは――

「マカオ!?!」

「ええ! この人が!?! さっきまでエロ猿でしたが!?!」

「ヴァルカンにテイクオーバーされてたんだ」

テイクオーバーとは、体に乗っ取る魔法であり、ヴァルカンは人間の体に乗っ取ることとで生きつないでいたようだ。

そしてマカオは激しい戦いをした後らしく、体はボロボロだった。

「おいマカオ目え開けろ！くそつ、誰がこんなことを！」

「ほとんどあんたの攻撃でしょうが」

「ロメオが待ってんだぞ！」

「え、無視？レーナやネコちゃんならともかく、あんたまで!」

「つ…………く…………。悪い、ナツ。十九匹までは倒せたんだが、二十四目にテイクオーバーされちゃった。これじゃあ、ロメオに合す顔がねえ」

「何言ってるんだ。そんだけ倒せば十分だ！」

ナツとマカオが笑顔で手を取り合う。

ルーシイはそれを見てかなわないあと感じていた（無視されて普通に話を進められたことは別にして）。

自分は手も足も出せなかったヴァルカンをこの人は一人で十九匹も倒したのだ。

ナツもヴァルカン相手に怯まず戦っていたし、寝てばかりいるレーナも、天候魔法という強力な魔法で、ヴァルカンよりはるかに強い白ワイバーンを一撃で倒したのだ。

ルーシイが入ったフェアリーテイルとは、本当に実力のあるギルドなのだ。

「ルーシイ、何にやにやしてるの？ 顔変だよ」

「……髭引っこ抜くわよネコちゃん」

「ルーシイ、顔変態だよ」

「はったおすわよレーナ!!」

いつの間にか起きてそばにいたレーナ。頭のたんこぶがまだ痛々しい。

「はっ、もしや二人を見て『少年×おっさん』を妄想し——」

「よーしはったおす！ 何が何でも土下座させてやる！」

たんこぶをもう一つ増やしてやろうかと思ったが、ハッピーにまあまあと諫められ、落ち着けと自分に言い聞かせ、深呼吸をくりかえす。

「ちよつとしたジョークです」

「思いつきり悪口だったわよ!!」

怒鳴り返したルーシイにレーナはヤレヤレと肩をすくめた。

そのしぐさにイラッとしたルーシイは今度こそ殴ろうと足を踏み出す。

ゴゴゴゴゴ——

「え、何？地震？」

「もしかしてルーシイの怒りか？コエー、ルーシイ」

「ち、違うわよ！あたしじゃなくて、これ、もしかして山全体が揺れてるんじゃない？」

「あー、おそらくー」

「何だ!?!レーナ！」

レーナは人差し指を一本立てた。

「さっきの天候魔法が思いのほか山を直撃したのと、止めに山全体にナツの攻撃の衝撃が響いたせいで、山にかつてないダメージを与えられたのではないかと……」

「……」

「……」

「……」

「……それってどういうことだ？」

真つ青になる三人に対して、一人理解ができていないナツに、レーナははっきりと告げる。

「つまり、山が崩れるということです」

今度はナツも理解したらしく、顔を青くする。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「みんな生き埋めだあい」

「だあい、じゃなーい!!」

全員、素早く走り出した。

途端、洞窟の奥が崩れだした。

「きやあああ生き埋めになるのはいやああああ!!」

「うおおおおっ! マカオ大丈夫かああああ!」

「ああ、すまねえナツ! とにかく走れ! 嫁さんと子供が俺を待つてる!」

怪我しているマカオは、ナツに背負われている。

「レーナ起きてえええ!」

「つてレーナ!?!」

「ぐー」

ハッピーに抱えられたレーナは幸せそうに寝ていた。

「ほとんどはあんたが原因でしょうが! 寝るんじゃなーい!!」

ルーシイの叫びを最後に、五人は雪崩に飲み込まれた――。